

研究論文

ラーニング・コモンズ運営に関わる大学院生が 発足初期に直面する運営上の困難とその解決方策について —ラーニング・アシスタントへの聞き取り調査結果を手がかりに—

加藤 雄大*

日本大学大学院文学研究科教育学専攻（教育学コース）博士後期課程

On the Difficulties Faced by Graduate Students Engaged in the Early Stages of the Operation of Learning Commons and the Solutions they Arrived at: Based on Data from Interviews with Learning Assistants

Yudai KATO

Ph.D. Student, Graduate School of Literature and Social Sciences, Nihon University

In this article, I examine the difficulties faced by graduate student staff involved in the operation of Learning Commons in its early stages, and how they tried to resolve those difficulties. To address these topics, I have used the interview data gathered from graduate student staff (Learning Assistants) in 2019.

Throughout the interviews, I found that they faced the following difficulties. (1) Difficulties related to disseminating information to students who use Learning Commons: Learning Assistants found it an onerous task communicating to students how to use the Learning Commons space. (2) Confusion about having to do kinds of work not covered in their contract: Learning Assistants felt confused about the gap between the work content explained by the university officials initially and subsequent actual tasks.

The Learning Assistants' solutions to these difficulties were as follows. Solution (a) is the countermeasure to resolve difficulty (1). (a) was non-cooperation with other departments in the university. Solution (b) is the countermeasure to resolve difficulty (2). (b) was a redefinition of work content by the Learning Assistants themselves.

キーワード：ラーニング・コモンズ, ラーニング・アシスタント, 学習支援

Keywords:

Learning Commons, Learning Assistant, Learning Support

はじめに

本論文では、ラーニング・コモンズの運営に関与する大学院生スタッフが、ラーニング・コモンズ発足初期にどのような困難に直面し、またその困難に対してどのように対処していくのかということについて検討する。

これまで、ラーニング・コモンズに関する研究は、主として図書館学や建築学の領域で多く蓄積されてきた。しかしながらこれまでは、利用学生のラーニング・コモンズ内での学習行動に着目する研究（例えば、

*E-mail: k.yudai.1209@gmail.com

投稿：2021年1月15日 受理：2021年10月1日

時任ら, 2019) や, ラーニング・コモンズの望ましい空間設計について検討する研究 (例えば, 宮田ら, 2020) が多く, ラーニング・コモンズの運営に直接関与するスタッフを対象とした研究はこれまであまりなされてこなかった。

そのような状況の中で, 山本良太による調査は, 本論文における重要な先行研究の一つとして位置づけることができる (山本, 2018)。山本は, ある大学でラーニング・コモンズが発足したときに運営担当者として採用された2名の専任教員が, 発足最初期にどのような困難に直面し, その困難に対してどのような解決を試みてきたかということについて, 聞き取り調査の手法を用いて検討している。

山本によれば, このラーニング・コモンズでは, 発足当初には「学生対応が少ない現状」があり, 教員らは「様々な不安を感じ」ながらも「同時に学習支援環境構築に向けた取り組み」を行っていた (山本, 2018: 38)。そのような学習支援上の困難を解消するために, 2名の専任教員は, 困難の解消のための具体的な取り組みとして「教員連携による学習相談の展開」や「他部署との連携」を基盤とした, ラーニング・コモンズ全体の環境構築を試みていた (山本, 2018: 39)。また, この専任教員らは「LC へのニーズ調査を教員に対して行い, その際に連携に向けた関係構築」を試みる, 「LC 開設の1年ほど前に新設された」関連部署との「連携を模索」するといった取り組みを行っていた (山本, 2018: 39)。こうした専任教員によるラーニング・コモンズ発足直後の一連の取り組みを, 山本は「草の根的なレベルから他部署との連携を模索し, 公的なものへと発展」させるためのものと位置づけている (山本, 2018: 39-40)。

この山本による調査は, ラーニング・コモンズを学習空間として位置づけようとする際に, 現場レベルで運営を担当するスタッフに何ができ, また実際に何をしようとするのかということ明らかにしようとしている点で, 重要な先行研究であるといえる。だが実際のラーニング・コモンズの運営には, 専任教員以外にも多くの人間が関わっている。そうした関係者の代表例が, 学生スタッフである。

以上のことから本論文では, 発足初期にラーニング・コモンズ内で日常的に発生していた運営上の困難と, その困難に対する解決方策がそれぞれどのようなものだったのかということについて, 当時の大学院生スタッフに対して実施した聞き取り調査の結果を用いて検討していくことを目的とする¹。そのために, まず聞き取り調査の具体的な手続きについて簡単に説明する (第1章)。そのうえで, 彼 (女) らが実際に直面した困難とはどのようなものだったのかということ (第2章) と, そのような困難に対して彼 (女) らがどのように対処しようとしたのかということ (第3章) について, それぞれ聞き取り調査の結果を踏まえながら検討していく。

第1章でより詳細に見ていくが, 今回, 聞き取り調査の対象となった大学院生スタッフは, 全員が大学院博士前期課程学生であったという立場上, 教職員間で定期的開催される会議に出席し, ラーニング・コモンズの今後の運営方針について各自の意見を述べることや, ラーニング・コモンズ運営のために配分された学内予算を自らの判断で執行する権限など, 教職員が行使できる権限の多くを持っていない²。同様に, 彼 (女) らは大学院生という立場上, 大学の一教職員として大学生の学習支援に携わった経験がない。そのため, 本研究で着目する大学院生スタッフは, 先に見たような専任教員による困難への解決方策とは質的に異なる方法を選択する可能性がある。

呑海沙織・溝上智恵子らがいうように, 大学院生スタッフは, 教職員と同様に「ラーニング・コモンズを実質的に運営する上で欠かせない存在である」 (呑海ら, 2011: 178)。つまり, 大学院生スタッフは「単純作業を機械的にこなす単なる学生アルバイト」 (呑海ら, 2011: 178) ではなく, ラーニング・コモンズにおいて日常的に生じる様々な学習支援に対して主体的な役割を果たしていくことが期待される存在である。

このことを踏まえると, 教職員と同様にラーニング・コモンズにおける学習支援の「主役」の一端を担う大学院生スタッフが直面する困難とそれに対する解決方策について検討しておくことは, ラーニング・コモンズ内での学習支援をより有意義なものとしていくために必要不可欠である。

1. 調査の概要

1.1 調査対象

筆者は、東京都内にある私立大学（以下、X大学と表記する）の一学部内に所在しているラーニング・コモンズに在籍している大学院生スタッフ（このラーニング・コモンズでは、大学院生スタッフを「ラーニング・アシスタント」と呼称している。以下、LAと略記する）に対し、聞き取り調査を実施した。X大学の当該学部は人文科学系学科、社会科学系学科、自然科学系学科の3系列から構成される総合学部であり、所属している学生・大学院生の専攻分野はそれぞれ幅広い。

X大学ラーニング・コモンズが発足したのは2017年4月であり、聞き取り調査実施時点では、発足から約2年が経過していた。このラーニング・コモンズは、図書館棟とは別の、当該キャンパスにおいて中心的な機能を持つ建物の1階出入口付近に設置されている。ラーニング・コモンズ内には飲み物や軽食を提供するカフェが併設されており、カフェのみを利用する学生・教職員が多数訪れるなど、人の往来はきわめて多い。また、このラーニング・コモンズの運営にあたっては、X大学教務課が運営業務全般を担当しており、施設内にはラーニング・コモンズ運営を現場で統括するスタッフとして、教務課臨時職員1名が常駐している。

調査対象者となるLAは、次のような方法で選定した。はじめに、調査対象者となりうるLAに対して筆者が個別に直接コンタクトを取り、口頭で調査への協力を依頼した。その後、調査への協力を同意したLAに筆者が連絡を取り双方の日程を調整したうえで、1人あたり50分程度の聞き取り調査を実施した。表1は、聞き取り調査協力者（Aさん～Fさん）の基本的な属性の一覧である。

表1からわかるように、Eさん、Fさん以外の協力者は全員、X大学ラーニング・コモンズ発足当初からLAとして勤務していた。各LAの専攻分野は、人文科学・自然科学領域に広く分布している⁴。また、コース科目履修経験の有無について見ると、大半のLAが学部卒業までに何らかの資格課程に在籍していた経験があることがわかる。教職課程を履修していた経験を持つ学生は6人中4人と多いものの、4年間を通じて教職課程科目を履修し続け、学部卒業時に教育職員免許状を授与されたのは、調査協力者の中ではAさんのみであった。

1.2 調査方法

聞き取り調査は、2019年1月21日から2019年1月25日にかけて、X大学ラーニング・コモンズ内で実施した。実際の調査は、調査協力者1名に対して筆者が聞き手となる1対1の対面面接形式で行った。聞き取りに先立ち、この調査ではICレコーダーを用いて発言内容を録音すること、聞き取った発言内容の中に個人の特定につながる可能性がある情報が含まれている場合については筆者が該当箇所をすべて匿名化する

表1 聞き取り調査協力者の基本属性³

ID	性別	年齢	研究領域／専門分野	学年	勤務期間	コース科目履修の有無	これまでに取得した資格・検定
Aさん	男	20代	地理学／人文地理学	M2	約2年	教職課程	教育職員免許状（高校一種地理歴史・公民）
Bさん	男	20代	歴史学／考古学	M2	約2年	学芸員課程 教職課程（1年次まで） 司書課程（4年次まで）	学芸員
Cさん	男	20代	化学／無機化学	M2	約2年	教職課程（1年次まで）	—
Dさん	女	20代	中国文学／中国文化	M2	約2年	司書課程（4年次まで）	—
Eさん	男	20代	地球科学／気象学	M2	約1年	—	ニュース時事能力検定2級
Fさん	男	20代	地理学／人文地理学	M2	約1年半	教職課程（2年次まで）	地域調査士

こと、聞き取った内容は、発言者個人が特定されないように配慮したうえで、学術的な目的で利用する可能性があることを口頭で確認し、確認事項すべてに同意できる協力者にものみ聞き取りを実施した。

実際の聞き取り調査では、半構造化インタビューの手法を採用した。すなわち、筆者が大まかな聞き取り項目を事前に準備したうえで、実際の聞き取り調査では協力者の発話の状況などを随時観察しながら、必要に応じて質問の順番を入れ替える、事前に用意した質問を実施しない、聞き取り項目にない質問を追加で行う、などといった対応をとった⁵。協力者には、筆者からの問いかけに対する回答としてその場ですぐに思いつくことや、その回答と関連する別の話題などを、できる限り自由な形で発言してもらった。なお、協力者の調査時点での率直な考えをその場ですぐに述べてもらうために、調査実施前にあらかじめ協力者に質問項目を知らせることはしていない。

聞き取り終了後、筆者が録音データからトランスクリプトを作成し、聞き取りの中で述べられた個人情報などを匿名化する処理を行った。協力者には、本論文の初稿となる文章を送信し、匿名化IDを個別に伝えたうえで、本論文内で引用されている自身の発言内容に誤りがないかあらかじめ確認してもらっている。以上、ここまで本章では、調査協力者の基本属性や調査の手続きについて簡単に述べた。

2. LA が直面したラーニング・コモンズ運営上の困難

本章では、LA がラーニング・コモンズの運営にあたって、どのような困難を経験してきたのかということについて、聞き取り調査の結果を適宜引用しながら概観する。その際、本論文では、聞き取り内容を(1)発足時から1年目までの一年間(2017年4月～2018年3月)、(2)1年目終了時から現在まで(2018年4月～聞き取り調査実施時点)の2つの時期に分け、それぞれの時期において日常的に直面していた困難とは、それぞれ具体的にどのようなものだったのかということについて検討する。

2.1 発足時から1年目まで

はじめに、ラーニング・コモンズ発足時点から1年目終了時点において、LA が日常的に直面していた困難について確認する。LA らの発言によれば、この時期のラーニング・コモンズでは、新しくできたラーニング・コモンズという空間がどのような場所なのかということ、一般利用者の学生に向けて広く周知していくことが、LA の主たる業務であった。この点について、Aさんは次のように述べている。

聞き手 [……] Aさんは、どういう取り組みをこれまでしてきたかっていうのを、まあ思いつく限りで…。

Aさん まあ、よくある点だと…まあなんでしょうかね。例えば学習目的で使ってない学生さんに、「まあこういう場所だから」っていうことを注意喚起すること、あるいは、ホワイトボードたくさんあるんで、そこに掲示じゃないですけど、文字で注意喚起してみたりっていうこともやりましたね。

聞き手 なるほど。まああの、[そのような取り組みをしていたのは]初期の頃だよな。

Aさん そうですね。

[……]

聞き手 まあ初期の頃は、ここが学習空間であるということを学生に広く認知させるための取り組みが、メインとしてあったと。

Aさん そうですね。メインとしてはね。

(2019年1月21日、Aさん。傍線は引用者による)⁶

このような形で利用者の学生へ向けた周知活動を進めていく過程で、各LAは次第に困難に直面することになる。そのことについて、Aさんは続けて次のように説明する。

Aさん [……] 一年目ですから、やはり土台作りの段階だったので、先ほども言いました通り、主たる目的としてこのスペースを使ってくれる学生さんのほうが最初は少なかったわけですから。まあそこで注意喚起とか当然するんですけども、まあなかなかうまく伝わらなくて、そのまま居座ってくれちゃう学生さんもいたりですとか。まあなかなか今の状態に持ってくるまでが確かに大変でした。

聞き手 まあやっぱり、今までは学習空間という認知がされていない中で、いろいろ注意して***。

Aさん そうでしたね。椅子もやけに高級で座り心地の良さそうな椅子が真ん中にあったりとか、あとは〔座席がサポートデスク7から見て〕死角にあたりとか、ってところでやっぱり携帯いじってみたりマンガ読んでみたり、いろんな学生さんがいましたので、そういう人たちに「ちょっとここではそういうのはやめてよね」という話をしていたときに、「え？なんですか？」みたいな受け答えを…。

聞き手 ちょっと怪訝な感じに。

Aさん そう怪訝な感じに〔対応された〕。まあその困難はありましたね。

(2019年1月21日、Aさん。傍線は引用者による)

Aさんによれば、当初のラーニング・コモンズでは「主たる目的としてこのスペースを使ってくれる学生さんのほうが最初は少なかった」。ここでいう「主たる目的」とは、あくまでも学習目的での利用のことを指している。Aさんの説明によると、発足当初のラーニング・コモンズでは、そのような目的で利用する学生が少なかったため、利用者の学生に向けた注意喚起を行っていたが、学生にはその説明の意図が十分に伝わらず、しばしば「怪訝な感じ」に対応されていたという。このAさんの発言からは、Aさんが学生からそのような対応をされることを、運営上の困難の一つとして認識していたことがうかがえる。

またこの点については、Bさんも類似の内容を語っていた。

Bさん [……] やっぱりちょっと認識の低い学生…が、昼寝の場として使っているっていう事実はあって。アプローチにすごい苦慮したのは、物分かりが良さそうな子に、「今やっていることをやめて、勉強するか、あるいは場所を変えてください」と言ったときに…こう嫌々ながら…〔別の場所に〕移っていく子のほうが、実は案外良くて。ヘラヘラしながらあんまり聞いてくれない子とか…なかなか相手のキャラによってアプローチの仕方を変えなければいけないのでわからない。そういう理解、こちらの理解と合わないっていうところの難しさとか。

(2019年1月21日、Bさん。傍線は引用者による)

Bさんは、学生への注意喚起を行う際、その都度初めて接することになる学生の「キャラによってアプローチの仕方を変えなければ」ならず、そのような学生にラーニング・コモンズの適切な利用方法について理解させることに、難しさを感じていた。

さらにCさんの証言によれば、学生に向けた注意喚起を行う際、ラーニング・コモンズ運営担当者は、ときには利用者側からのあからさまな反発を受けるようなこともあったという。この点について、Cさんは次のように述べている。

聞き手 で、なんか注意するときに、学生からも言われたりするってことがあったんですか？

Cさん あー…。いやあの僕は直接は学生からはなにか言われるってことはなかったですね。反論を受け
るっていうのは、僕はなかったですね。

聞き手 Cさんは、なかった。他の人は…あったみたいな話は聞いてた？ どうなんでしょう？

Cさん Yさん [=ラーニング・コモンズ常駐の教務課臨時職員] かもしれないんですけど…。なんか [ス
タッフのうちの誰かが] 反論を受けたって話は聞きましたね。

(2019年1月23日, Cさん。傍線は引用者による)

このように、発足最初期のラーニング・コモンズにおいては、学生へ向けた注意喚起がLAの主たる業務であり、それはLAにとってはしばしば困難を伴うものであった。

また、そのような注意喚起に関わる困難の他に、この時期のラーニング・コモンズでは、そもそも学習相談に関連する問い合わせ自体がないという状況も生じており、LAはそのような状況にも戸惑いを覚えていた。この点については、DさんとBさんが、それぞれ次のように当時の状況を語っている。

聞き手 [……] まず発足から1年目までの、昨年度のことで、まあ困ったことがあったかなかったか。で、
困ったことがあったとしたらどういうところで困ったかっていうのを、ちょっと思いつくま言
っていただければいいんですけど。

Dさん 困ったこと…。[……] まあ学術的な質問とかはなかったんで、その辺は困るというか…、まあ
学部生もなんかここの使いかわからないんだらうな、って感じはしてて。

(2019年1月23日, Dさん。傍線は引用者による)

Bさん [……] あとはまあ、質問に来てくれない。学習面で言うのであれば、去年一年間 [のこと] で
あれば、我々の立ち位置がやはり確立されていない分、[利用学生が] 質問に来ないというこ
とで、まあちょっと手持ち無沙汰…こちらも手持ち無沙汰になっていた、ってことがあるかも
しれないですね。

(2019年1月21日, Bさん。傍線は引用者による)

ここでBさんとDさんは、発足直後のラーニング・コモンズでは、学生からの質問対応に関する業務がほとんどなかったことを述べている。Bさんによれば、この時期のラーニング・コモンズでは、「質問に来ないということ、[……] こちらも手持ち無沙汰になってい」る状況にあった。また、Dさんはそのような状況が生じていた要因として「学部生もなんかここの使いかわからないんだらうな、って感じ」があったと振り返っている。この点について、Fさんはラーニング・コモンズ内でのLAの業務内容について、大学側から事前に「サポートデスクにいるわれわれ大学院生っていうのは、学生たちから来た質問とか、そういったことに答える、という仕事がメインっていうふうに向っていた」(2019年1月25日, Fさん)と話している。そのような説明を受けて応募をしたにもかかわらず、この時期のラーニング・コモンズでは、そうした業務は実質的に発生しておらず、各LAは当初の大学からの業務内容の説明と実際の業務内容との間のギャップに困惑していた。そのことは、次のDさんの回想からも読みとれる。

Dさん [……] まあでも院生 [=大学院] に入ってるし、学部生のなんかまあ…助けになるようなこと
ができたらいいなとは、少しだけですけど思っていました。

聞き手 ああ最初だけ。

Dさん 最初だけ、少しだけ思っていました（笑）

聞き手 えーと…その、どのくらいまでそれは思っていました？

Dさん え、でも4月5月くらい〔まで〕ですかね。

聞き手 ふーん。

Dさん でもここのルールとかもあまり全然決まっていなかったじゃないですか。だから…何にもできないんじゃないですけど。自分でもどうしたら、〔LAとして〕何したらいいんだろうみたいなのがわかんなくなっていましたね、夏くらいには。

（2019年1月23日、Dさん。傍線は引用者による）

このように、Dさんは、LAとして採用され勤務を開始した直後には「学部生の〔……〕助けになるようなことができたらいいな」と考えていた。ところが当時のラーニング・コモンズ内ではそうした学生対応が発生する状況にはなく、発足から数ヶ月が経過した夏の時点で「自分でもどうしたら、何したらいいんだろう」と思うようになり、次第にここでは「何にもできないな」と考えるようになっていったという。

以上、ここまでは発足初期から1年目終了時までにLAが日常的に直面していた困難とはどのようなものであったのかという点について見てきた。その結果、この時期のラーニング・コモンズでは（1）ラーニング・コモンズを学習空間として構成するための利用者への周知に関わる困難、（2）本来想定された業務に従事できないことへの困惑、という2つの状況が生じていたことがわかった。

2.2 1年目終了時から現在まで

続いて、1年目終了時から聞き取り調査実施時点までの時期において、LAがラーニング・コモンズの運営にあたり感じた困難について見ていく。この時期は、X大学ラーニング・コモンズが発足してから約1年が経過しており、利用者の学生の側にその存在が徐々に認知されはじめた時期にあった。そのような状況の中で、LAは少しずつ先述の「学生たちから来た質問とか、そういったことに答える、という仕事」に近い業務内容を経験するようになっていった。例えばDさんは、この時期のラーニング・コモンズでは「4月になって新一年生が、「履修の仕方がわからない」とか質問が結構増え」てきたために、そういった学生への対応が「ちょっとてんやわんや」として振り返っている（2019年1月23日、Dさん）。

その一方でLAの間では、ラーニング・コモンズ利用学生との利用マナーをめぐるやり取りが、引き続き困難な業務の一つとして認識されていた。この点についてEさんからは、利用マナーのよくない学生に注意をしようとした際のエピソードとして、次のような証言を聞き取ることができた。

聞き手 実際に注意に行ってみて、〔……〕学生はちゃんと聞いてくれる？

Eさん えーと…まあ半々くらいですかね。

聞き手 半々くらい。

Eさん 半々くらいはちゃんとわかってくれる子たちがいるんですけど、もう半分くらいはガン無視の方〔=学生〕が…。

聞き手 ガン無視される？

Eさん ガン無視されたりとか、もうなんか聞いてないふりしちゃう子がいるので。

聞き手 ああ、それはなに？ 例えば携帯とかをこうやってさ〔=聞き手が携帯電話を操作するような動きをする〕。っていうところに注意しに行っ…。

Eさん そうですね。〔注意しても〕「あー、うん」みたいな。なんかもう聞く耳を持たないっていう言い方が一番いいと思うんですけど。

聞き手 ああ、それは…切ないな。

Eさん そういうときはちょっと…言っても無駄だと思うんで。僕もそんなに威厳がある方じゃないんで、どちらかというとない方なんで（笑）。

（2019年1月25日、Eさん。傍線は引用者による。）

以上、ここまで見てきたように、LAへの聞き取り調査の結果から、発足初期のX大学ラーニング・コモンズでは大きく分けて（1）利用者に向けたラーニング・コモンズという学習空間の利用方法の周知に関する困難、（2）発足以前に想定されていた学習支援業務に従事できないことへの困惑の2つの困難が日常的に生じていた。

3 LAによるラーニング・コモンズ運営上の困難に対する解決方策

前章では、ラーニング・コモンズ発足初期に現場の運営スタッフとして雇用された大学院生が、実際の運営にあたりどのような困難に直面してきたのかという点について確認してきた。このことを踏まえて、本章ではこれらの困難に各LAがどのように対処しようとしていたのかという点を見ていきたい。ここでの検討を通じて、LAによる現場レベルでの対応が、具体的にどのようなものだったのかという点を検討していく。

はじめに、前章（1）の困難についてである。この点についての解決方策として、Eさんからは次のような発言を聞き取ることができた。

Eさん ただ単に結構騒いでる人というか、まあ基本的には○○○なんですけど。ガタイのいい人たちを注意するのはちょっと怖かったなっていうのは…はい。

聞き手 ああ、○○○とか○○○とかね。

Eさん [……] ちょっとほんとに怖い人たちを…全然基本的には注意はしてたんですけど、ちょっと…うん、ガタイのいい人たちを注意するのはちょっと怖かったんで、まあいろんな方に協力していただきながら、はい。ときには学生課の方をちょっと呼んだりとか、はい。

聞き手 ああ、学生課のね。

Eさん なんか… [学生課職員の中で] すごい○○○に精通している方にちょっと注意してもらったりとか。

[……]

聞き手 なるほど。そういう事態に直面したときは、まず呼ぶのは大人の人。

Eさん そうですね。ちょっとさすがに…。

聞き手 大人の人に間に入ってもらうって。…ああ今まさにだね [=聞き取り実施時に偶然ラーニング・コモンズ内に居合わせた教務課職員が、学生へ注意をしに向かう]。[……] 今、Zさん [=教務課職員] が…。今まさに [そうした対応をしている] ってことだよな、たぶんね。

Eさん そうですね、ああいうことですよな。

（2019年1月25日、Eさん。傍線は引用者による。）

ここでEさんは、LAが利用マナーのよくない学生に向けた注意喚起を行う際、利用者側から明確な反発を受けることが想定される場合は、学生課の職員に依頼し、職員と一緒に注意喚起を行う、偶然その場に居合わせた教務課職員に立ち会ってもらって注意を行うといったような形で対応をしていたと述べている。

このような対応は、Eさんに特有のものではない。この点についてはFさんも同様に次のような証言をしている。

聞き手 注意っていうのは、具体的にはどういったふうに注意をするのかっていうのは…。

Fさん 基本的にはその…ものすごく厳しいような形で言うことは避けて。まあその…「ちょっと声が大きいので、トーン下げてください」というような、軽いような形で最初は軽く言いつつ、もうあまりにもひどいようであれば、…いつときあったのは、学生課〔職員〕に来てもらう、とか…。

聞き手 ああ、なるほど。

Fさん で、あとは一緒に入っているYさんと一緒に、学生番号を…学籍番号を控えるように行動を取る、[……]。

聞き手 それは…それはもう、ほぼほぼ最終手段…。

Fさん 最終手段ですね、はい。

(2019年1月25日、Fさん。傍線は引用者による)

Fさんによれば、各LAは、最初はなるべく穏当な形で説明を行い、その対応で問題が解決されない場合、最終手段として「学生課に来てもらう」といった対応や、ラーニング・コモンズ内に常駐している教務課臨時職員と一緒に「学籍番号を控える」といった対応を取っていた。

ここでEさんやFさんが述べているような解決方策は、先行研究でも見られるような「草の根的なレベルから他部署との連携を模索」(山本, 2018: 39)する動きに、やや類似したものであると解釈できる。しかし、先行研究で明らかにされている専任教員らの連携と、ここでEさんやFさんが説明しているようなLAの「連携」との間には、質的な差異がある。山本によれば、専任教員らによる「草の根的なレベル」の連携とは、「学習環境構築」のために「授業科目を開発する部署」と協働して、「アクティブラーニング型授業に関する学習会を持ち掛ける」といったような積極的なものであり、そのような連携の結果、後にこの学習会は「大学のFD委員会の後援を受ける」など、公的な取り組みに発展していった(山本, 2018: 39)。その一方で、ここでEさんとFさんが述べているような、LAと学生課や教務課との間の「連携」は、ラーニング・コモンズを「公的なもの」にしていくための積極的な連携ではなく、あくまでも現状のラーニング・コモンズを学習空間としてなんとか維持するための、応急的な「連携」であったと理解することができる。

続いて、前章(2)の点について見ていく。この点については、主にBさんから当時の状況を詳細に聞き取ることができた。

Bさん さらに言うならば、その運営体制というか、機能面、ソフト面って意味でも、我々が配置されてなお、学校〔=大学〕からのアプローチっていうのが全然ない状態。あるいはそもそもこっちもどんなことを要求すればいいのかっていうのがまだ学生から集められていない状態なので、実は押すも引くもないような、「フワフワしている」でもなく「押すもの」がないっていうような状態だったので、ある種最初は仕方がないかなと。そういう意味で、[自分たちで]ルールを作るとか…一番最初にあったふんわりしたルールを、みんなに納得してもらえるかたちでアウトプットしなければいけないっていうのはもう、入った瞬間に理解したこと。[……]
[当時は、] どの時期までにどんなことができるか、どの程度のアウトプットができるかっていう、ある種の差し迫ったカウントダウンみたいなものが見えていて…。まあ当時いたメンバーっていうのが、それにむけて…まあ全員ではないんですけど、面白いように動いた。まあ変な話、互いの状況を忖度しながら(笑)。面白いように…面白くなるようになっていけばいいんですね、動

いて。

(2019年1月21日, Bさん。傍線は引用者による)

ここでBさんは、発足当初のラーニング・コモンズには大学側からの実質的な支援が乏しかったこと、また、そのような状況下で現場のスタッフ自身によって、独自のルールを構築しなければならないと思ったことを述べている。Bさんによれば、発足当初のラーニング・コモンズは、大学側からの実質的な支援がほとんど期待できない状況にあった。そのような状況の中で、Bさんはその状況を「仕方がない」と思い直し、ラーニング・コモンズの利用方法に関するルールの設計をLA自身で行い、そのルールを「みんなに納得してもらえるかたちでアウトプット」することが自身の業務であると認識するようになったという。

ここでの一連の発言からは、(2)の困難に対するLAの解決方策は、概ね次のようなものであったといえる。すなわち、採用前に説明されていた学習支援に関する業務にはほとんど従事できず、「学校からのアプローチってというのが全然ない」現状を受け入れて、その現状に適合するように各LA個人の中で自身が行うべき業務内容を定義しなおすというものである。このような「業務内容の再定義」といった解決方策は、現実的に利用できる資源に乏しいLAに特有の解決方策であったと考えられる。

おわりに

以上、ここまで本論文では、ラーニング・コモンズ発足当初に配置されたLAが、ラーニング・コモンズの運営にあたりどのような困難に直面し、その困難をどのように解決しようとしてきたのかという点について、聞き取り調査の結果を用いて検討してきた。最後に以下では、本論文を通じて明らかになった知見と、今後の課題について簡単に整理する。

聞き取り調査を通じて、X大学ラーニング・コモンズの運営に現場レベルで関与していた大学院生スタッフは、主として(1)利用者に向けたラーニング・コモンズという空間の利用方法の周知に関わる困難、(2)発足以前に想定されていた学習支援業務に従事できないことへの困惑、といったことに直面していたことがわかった。また(1)の困難に対しては、(a)対外部署との「応急的な「連携」」、(2)の困難に対しては(b)LA個人の中での「業務内容の再定義」といった方法で、日常的に発生する困難の解消を試みていたことが明らかになった。

解決方策(a)について、先行研究(山本, 2018)に即して言うならば、専任教員と比較して行使できる権限の少ないLAは各所との「連携」を通じて、日常的に生じる困難の解消を図ろうとしていたということが出来る。ただし、LAは専任教員と比べ、実際に行使できる権限が限られていることから、LAらによるこうした解決方策は、どうしても応急的なものにとどまる傾向にあった。また解決方策(b)については、ラーニング・コモンズの外部に存在する様々な資源に依存しない方法で困難の解消を図ろうとしていた点で、LAに特有の解決方策であったと見る事が出来る。この場合、各LAは、たとえば雇用契約時に大学側から示された業務内容と実際との間に乖離が生じていることについて大学側に問い合わせるといったような対応は取らず、当初の説明と明らかに異なっている現況を「仕方がない」ものと考え直し、現時点で遂行可能な業務(ラーニング・コモンズ利用ルールの策定など)に取り組んでいく方向に考えを改めていた。

ただしこれらのことは、発足初期にラーニング・コモンズの運営に携わった各LAが、外部との積極的な連携の可能性を一切模索しようとしせず、ラーニング・コモンズの運営をめぐる生じる困難すべてを上記のような方法で解消しようとしていたことを示すものでは必ずしもない。各LAは、場合によっては、より根本的な解決方策を模索する場合もある。たとえばBさんは、教職員とLAの間で半年に1回程度実施される

ミーティングに出席した際、ラーニング・コモンズをより望ましい学習空間として構築していくために、出入口に学生の入退室を記録し管理するための「ゲートが必要だ」という要望を、教職員に向けて「立場的には言いすぎかなと思うくらい激しく言った」ことがあるという（2019年1月21日、Bさん）。このようなBさんの行動は、現場レベルで挙げられている要望を大学側へ強い言葉でアピールすることで、大学側からの支援を引き出そうとする動きであったと理解することができる。しかしながら、本論文はあくまでも発足初期のラーニング・コモンズにおける日常的な実践において頻繁に生じている運営上の困難に対して、LAがどのような対応を取ってきたのかを検討することを目的としてきたため、このような特殊な状況下での各LAの対応については、十分に検討することができなかった。この点については、今後の課題としたい。

その一方で本論文は、大学図書館の外部に設置されたラーニング・コモンズにおいて、発足から間もない時期に運営に携わる関係者の一人である大学院生スタッフがどのような困難にさらされるのかということの詳細に検討してきた点に、学術的な意義を見出すことができる。近年では、様々な事情から大学図書館の外部にラーニング・コモンズが設置されるケースが多数あり、今後そうしたラーニング・コモンズにおいても、本論文を通じてこれまで見てきたような事例と類似の状況が生じる可能性がある。その意味で、本論文を通じて得られた知見は、今後の大学教育に対して重要な視点の一つを提供するものであるといえるのではないだろうか。

注

1. ラーニング・コモンズに勤務する大学院生スタッフを調査対象に設定した研究として、竹永啓悟・城阪早紀・阿部康平による、同志社大学良心館ラーニング・コモンズをフィールドとした事例研究が挙げられる（竹永ら、2019）。しかしながら、竹永らの研究では「ラーニング・アシスタントの勤務実態を精査し、LAの勤務経験と大学教員としての教育指導能力との関連を解明すること」（竹永ら、2019：3）に主眼が置かれており、大学院生スタッフの勤務上の困難についてはほとんど触れられていないため、本論文では主要な先行研究としては位置づけない。
2. この点について、永井暁行・廣川和貴・米谷さくら・中村和彦の報告によれば、北星学園大学ラーニング・コモンズでは「予算管理」や「個別学習支援に関する関係各所の調整」などの業務は「専任事務職員」または任期付の「助教（教員）」の役割である一方、学生スタッフは「個別学習支援」に関する業務の一部のみを担当し、予算管理や関係各所との調整といった業務には従事していない（永井ら、2020：116-7, cf. 表2, 3）。これはあくまでも北星学園大学ラーニング・コモンズの事例であるが、この点については、その他の多くのラーニング・コモンズにおいてもほぼ同様の傾向であると考えられる。
3. 「学年」は聞き取り調査実施当時（2019年1月時点）のものである。また、「学年」に付されている「M」は「Master（博士前期課程）」の略号である。
4. 今回の聞き取り調査協力者は、いずれも人文科学領域、自然科学領域を専攻する大学院生であったが、当時在籍していたLAの中には、教育学や社会福祉学などの社会科学領域を専攻する大学院生もいた。
5. 聞き取り調査にあたり、筆者が事前に準備した聞き取り項目は、大きく次の9つである。1. LCの現状の学習環境についてどう思いますか。2. 現在のLCでは、どのような学習支援を行っていますか。3. これまで、LCの学習支援環境を構築するためにどのような取り組みをしてきましたか。4. あなたは、どのような目的でLAの募集に応募しましたか。5. あなたの、LCの第一印象を教えてください。6. LC発足から1年目終了時までの間で、あなたはLAとしての勤務中にどのような困難を感じましたか。7. LC発足1年後から現在までの間で、あなたはLAとしての勤務中にどのような困難を感じましたか。8.

あなたは、今後LCがより良くなるために、大学側からどのような支援が必要だと思いますか。9. あなたは、今後LCがより良くなるために、LA個人にどのような取り組みができると思いますか。なお、項目1～3については、先行研究において設定された聞き取り項目（「①当該施設の学習環境、②当該施設における学習支援の現状、③学習支援環境構築に向けた取り組み」）を参照している（山本，2018：38）。また、今回の聞き取り調査は、過去に生じた出来事について主観的かつ回顧的に述べてもらうという趣旨のものであったため、調査協力者による一連の発言が、必ずしも当時の状況を適切に表現していない可能性がある点には十分留意しておく必要がある。

6. 本論文において、ゴシック体で表記されている箇所は、すべてトランスクリプトからの引用である。また、トランスクリプトに付した記号の凡例については次のとおりである。

聞き取りの中で数秒程度の沈黙や言いよどみがあった箇所には「…」を、発言内容を録音音源から聞き取ることができなかった箇所には「***」をそれぞれ付した。個人情報保護の観点から匿名化が必要であると判断した発言は、発言の長さに関わらず該当箇所をすべて「○○○」で置換した。引用に際して、紙幅の都合から発言の一部を省略した箇所には「[……]」を付した。引用文中の亀甲括弧「〔 〕」内は、筆者による発言内容の補足・修正である。以下、特に断りのない限り同様。

なお、各LAによる一連の発言は、場合によっては自身が所属する大学を批判するような内容に見えることもあるが、これらはあくまでも当時の状況に対する各LAの率直な評価であり、調査協力者の各LAに所属大学を批判する意図は一切なかったことを付言しておく。

7. X大学ラーニング・コモンズでは、運営担当の教務課臨時職員やLAが常駐し、学生からの質問相談などを受け付ける窓口を「サポートデスク」と呼んでいる。

引用・参考文献

- 呑海沙織・溝上智恵子・大学図書館研究グループ（2011）、「大学図書館におけるラーニング・コモンズの学生アシスタントの意義（グループ研究発表、〈特集〉第52回（2010年度）研究大会）」日本図書館研究会『図書館界』第63巻第2号、176-184ページ。
- 永井暁行・廣川和貴・米谷さくら・中村和彦（2020）、「北星学園大学ラーニング・コモンズにおける学習支援サービスと今後の課題」北星学園大学『北星論集（文）』第57巻第2号、113-121ページ。
- 宮田圭介・亀井暁子・林左和子・羽田隆志・野村卓志・的場ひろし・井出直樹（2020）、「ラーニング・コモンズのあるべき姿の検討」静岡文化芸術大学『静岡文化芸術大学研究紀要』第20号、135-142ページ。
- 竹永啓悟・城阪早紀・阿部康平（2019）、「滞在型ラーニング・アシスタントの学習支援経験を通じた教育指導能力の形成—同志社大学良心館ラーニング・コモンズの事例から—」同志社大学学習支援・教育開発センター『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』第10号、3-18ページ。
- 時任隼平・巳波弘佳・藤井恭子・坂口将太・中野由美子・石橋将広・大田詠子・明賀豪・佐永田千尋（2019）、「〈実践研究報告〉ラーニングコモンズが持つ機能と学習活動の結びつきに関する研究」関西学院大学高等教育推進センター『関西学院大学高等教育研究』第9号、53-59ページ。
- 山本良太（2018）、「ショートレター ラーニングコモンズ開設初期の学習支援環境構築に関する現状分析—運営担当者の視点から—」日本教育工学会『日本教育工学会論文誌』第41巻Suppl.号、37-40ページ。